

「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向

—— 裁松・宝山良雄の場合 ——

松 本 皓 一

一 はじめに

本稿は、「教育者」型人格における宗教体験がその生活史上の爾後の行動傾向に、如何なる意味をもちうるかということを、事例研究を通して明らかにする一連の研究の一環であり、先に発表した『教育者型人格における禅体験の受容と変容——自得・小山忠雄と晃水・山本良吉の比較考察——』⁽¹⁾につづくものである。

今回の事例である宝山良雄^{タカラヤマ}については、第四十五回日本宗教学会学術大会において口述発表し、そのレジメも同学会学術大会誌に掲載済みであるが、⁽²⁾いづれも時間や紙面上の制約から問題点のみの指摘にとどまって、十分な内容をつくすことができなかった。そこで、本稿は、その後の実地調査による追加補足を含めて稿を新にし、体系的なモノグラフとして発表することを前もってお断りしておきたい。

ところで教育者型人格の概念規定は、すでに前掲論文において明確にしてある。⁽³⁾とくに本研究の事例を含む一連の諸事例は、比較考察の視軸にのせるために、あえて同時代性、同文化の共有性という点から選択してあるので、教育者型人格の定義を大きく変更する必要はないと思う。むしろ教育者型人格の特質も、時代によって変りうるけれども、ここではあくまでも、明治二十年代から同末期までを中心とした日本社会の価値観のなかでのことに限定したい。

したがって教育者型人格の内容規定は、前記論文を参照して頂くことで省略するが、一言だけ付言すれば、いわゆる教師型人間像は、客観的対象的に規定される職業像であり、教育者型人格は単なる職業的生活者にとどまらず、教育(広義の)という職業形態を通して自覚された社会的使命感や責任感、ないしこれに支えられた理想や信念の追求にかかわる内面的生き方により強く関係しているものと思う。その意味で

教育者型人格は、主観的価値意識の世界か、他から期待される社会的評価を自覚したところに成り立つと思われる。そうした主観性の強いものでありながら、これを更に客観的に観察することによって、われわれは「教育者型人格」として措定することが可能なのである。

二 宝山良雄の生活史

宝山については、その没後数年にして宝山先生遺著出版会より刊行された伝記『裁松宝山良雄先生』（以下『伝記』）一冊があり、その生いたちの概要を知ることができる。更に若干の関係資料等により補うことが可能である。⁽⁴⁾

最初に宝山を寸描すれば、端的に教育者ということができよう。しかしユニークな教育者である。在家から出でて仏門に身を投じ、禅僧としての修行体験をもち、再び世俗へ復帰して学を修め、広い視野に立った独自の理想のもとに生涯を教育事業にかけた。

公・私立のいくたの学校長を遍歴して生涯を閉じたが、中でも私立耐久学舎での教育方針は世の注目を集めた。本稿は、そこに焦点を絞って、教育者としての宝山の行動に顕・潜在する宗教的特質を考える。

以下その生いたちを中心に、彼の人物像を考えてみたい。

宝山良雄（一八六九—一九二八）は明治元年三月金沢市水溜

を名のり、同時に良雄と改名したが、十九才ごろ迄は森姓で通していた。

宝山の生まれた明治元年は、正月に鳥羽伏見の戦いが始まり、維新の幕が切って落された年である。また生月の三月には五ヶ条の御誓文が發布され、従来の閉鎖的国家体制から開化主義の新国策に転じたときであることも、宝山の生涯を考える上できわめて暗示的なものがある。つまり宝山の世代は、文明開化の名のもとに、西欧志向型の価値理念のなかに生きることになるからである。

それは、一部には若干の紆余曲折や反動をみせながらも、一般的潮流としては、新時代に適応して世に出るといふ欲求のもとに、個人能力の開発という方向をとりながら、やがては富国強兵という国家体制のなかに吸収されていった。

そしてこの傾向は、明治二十年代、三十年代の二度の大戦を通して一層強まると共に、教育をも又国家管理の手中に吞

町に生まれた。父は森友任^{ともひで}、母はたつ、幼名は鎌吉であり、兄には後に旧制第三高等学校長となった森外^{ほか}三郎がいる。彼は後年大阪の宝山家に入籍して同姓

みこんでしまった。しかし他方、そうした明治ナショナリズムに抗するように、その底から個人我の覚醒や社会的矛盾への自覚が捉され、個の内面的生活を重視する傾向、あるいは逆に社会変革への底流が形成されつつあった。

宝山もまた大きく見ればこうした時代の子であったが、こうした環境としての時代については、すでに別の事例研究での社会的背景・文化的欲求の問題として述べたので、ここではそれに譲ることにする。

次に、宝山の生地金沢のもつ意味を考えてみたい。言うまでもなく金沢は旧前田家百万石の城下町であり、加越文化圏の中心であった。しかし開国にともなう新時代の文化伝播は、まづ主要開港場を起点として、街道や海運筋やがては鉄道によってつながれた地方主要都市へと、おおむね西南日本から徐々に北上し東進していったと考えられる。

若干の例外はあるにしても明治開港以来のキリスト教に代表される西洋新文化は、およそ右のようなルートで媒介され受容されていったと言えよう。

しかし北陸雄藩の旧城下町として高度の伝統文化を誇り、地元産業の経済力に恵まれた金沢の特殊性は、新しい文化受容の基盤を備えておりながら、同時に伝統文化の豊かさと同厚さのゆえに、むしろ開化主義の軽薄な風潮になじまないものがあったのではあるまいか。

こうした保守的体質に加えて、裏日本という地理的条件が、金沢に新時代の文化受容の道を遠くしていたとも言える。そしてこのことは、結果的に時代の潮流から取り残される焦燥と不安を高めることにもなった。

宝山を含め加越地方の志ある青年にとって、このことは耐えがたいことであった。いま、宝山と同時代の青年像のいくつかをあげてみても、いかに彼らが、この地の文化的欲求不満から脱出しようと煩悶していたかがわかる。

言うまでもなく、この欲求と不満の人格には、問題解決のための緊張体制が力動化している。例えば、金沢で不遇な時代を送っていた西田幾多郎や山本良吉らがその典型であり、更に、この両者の中枢に位置する北条時敬（一八五九—一九二九）を中心とし河村善益、早川千吉郎、秋月左都夫、鈴木馬左也、これらの中に宝山良雄をも含める人間関係の力学には、単に同郷のよしみという空間的意味を越えて、互いに向上琢磨し、求め合って魅了しつくすような、きわめて粘着性と吸引力に富んだ場を想定することができる。⁶⁾この点については、宝山を中心に在家居士禅の場として後述したい。

いづれにしても、右のような意味をもった年と土地に、宝山は生を受けた。しかしその翌年（明治二年）の夏母を失い、更に六年後（明治八年）の冬には父を亡くしている。生家は必ずしも裕福とは言えなかったから八才で両親を失った彼

は、十一才の時、縁を辿って仏門に入った。

基層宗教体験としての禅修行

宝山の出家は、両親に早く死別した少年の身の振り方として、当時一般に無難な道と考えられていたかもしれない。仏教信仰の篤い北陸の精神風土では、こうした考えも受け入れ易かったと思われる。実母の母の死後すでに継母がきていたが、出家については継母からの助言もあったらしく、事実、彼が得度を受けたのは、継母の縁故先になる金沢市の曹洞宗・宝円寺（現同市宝町六ノ十四）の住職玄那莫道（姓曾根）についてであった。後の彼の行動と関連して考えられるのであるが、出家動機の一つとして、仏門に入ることにより、いささかでも勉学の機会が得られるかとの期待もあったのではなからうか。

得度の師・莫道は石川県徳翁寺の二十三世貫山道居の法を嗣ぎ、宝円寺三十六世であると共に、大阪の大広寺三十二世となり、また同じ大阪の自性庵の開山としても名を残している。宝山は安名を徹玄とし、宝円寺で約二年ほど修行した。明治十三年師莫道の遷化によって、兄弟子である大須真龍に従って静岡県袋井の専門僧堂可睡齋に掛塔した。

当時可睡齋の堂頭は、名声高き第四十七世の西有穆山（一八二一—一九一〇）であった。明治十年、衆望を背おって五十才の若さで晋山した穆山は、宝山すなわち修行僧・徹玄が

可睡齋の門をくぐったときはまだ六十歳、豊饒として多数の雲水を率い、『正法眼蔵』の提唱と仏祖道の実践に余念がなかった。

鈴木泰山氏によると「穆山が禅僧として最高に充実した活躍期は可睡齋時代である」という^{?)}。とくに穆山の宗門内諸活動の功績によって、可睡齋が大本山総持寺の準直末（のちに純直末）寺院に遇せられたのが明治十四年九月という点をみると、宝山の掛塔中は、穆山の活動が最も盛んであったと思われる。

宝山が雲水として、どの程度の修行を積んだかは残念ながら不明である。しかし少くとも少年僧の宝山が、このすぐれた禅の巨匠西有穆山を中心に活動している修行集団に組み込まれ、理窟ぬぎに禅僧としての生活を迫られていたことは間違いない。明治初年の、しかも穆山会下の可睡齋僧堂の修行はきびしかったであろう。ここで十代前半の宝山が一介の雲衲として過した禅の修行とは、文字通り身体をもって行じた実践行であり、人格形成途上の宝山にとって、きわめて重要な意味をもつ。後に述べるように、後年の彼の教育理念の中には、集団生活における生活規範の自主自律的实践を重視するなど、主として僧堂生活との関連において考えられるべきことの多いことを指摘しておこう。

明治十七年、宝山は真龍に随行して大阪東高津^{こうつ}の禅林寺

(現南区中寺町一五)に移り、恐らく同十九年ごろまでは其処にいた。禅林寺は先の戦災で焼失したが、その後再建されている。開創は天正元年の古刹である。

大須真龍は禅林寺の世代に入っておらず、また『曹洞宗大系譜』による限り彼の名前を見出すことはできない。現存する宝円寺・禅林寺の関係者でも、既にその名を記憶するものはいなかった。なぜ彼が禅林寺に身を寄せることになったのか、恐らく真龍は、師莫道が大阪(現池田市)の大広寺三十二世を住した関係から、その法縁を辿って、禅林寺を頼っていったのであろう。大広寺三十六世天外岱雲の法嗣に、禅林寺へ晋住した賢外詰英や月浦道林がいたということは、両寺の関係の近さを示すものである。後年の明治二十二年秋、同志社在籍のころ、宝山が摂州箕面山の紅葉探勝の途次、大広寺に寄ったことがある。その折、彼は「住僧は余が知る人なり」と語っている。これを遡って考えれば、禅林・大広・宝円の脈絡を知ることができよう。真竜はこの法脈をつてとして可睡斎僧堂から禅林寺へ移った。その後の真龍について正確な消息は掴めないが、一説によると昭和初年、同寺を辞したという。

ここには正式の住職地をもつことができず、寺から寺へ遍歴の修行をつづけている僧の姿がある。本来、一処不住が修行僧の姿だとしても、見方を変えて言えば、それは、いつ果

てるともわからない長夜の旅を続けていると言うことでもある。

更に詳細な検討を要するとしても、真龍はこうした寺から寺への遍歴を余儀なくされていた僧であつたかもしれない。そうとすれば、それに随って移り歩いた宝山も又、同じ生き方をしていたと言うことになる。ただ宝山の場合は、更に若年の僧であつたから、気持ちのうえで年長の真龍と異なるものがあつたろうが、いづれにしても、いつのときか、この見通しのつかない旅をふん切る必要には迫られていた。

明治十九年十九才のとき、彼の前途を慮ばかつた実兄の外三郎のすすめにより、宝山は還俗することになる。

当時、外三郎は東京帝国大学に在学中であり、幼少から仏門に身を投じた実弟を不憫に思っていた。とくに自らは最高学府に学ぶ立場を考えると、前近代的とも見える仏道修行の生活のなかに、いつまでも弟を置くことはできがたいという判断があつたのであろう。又そうした判断を可能にする状況が、宝山をめぐる森家のなかに将来したのだとも思われる。しかしこのことは、極論すれば人間の生き方として、伝統的か、近代的かの志向の選択である。

もともと年少時における出家の動機は単純なものであつた。加えて成長と共に発達した彼の文藝的素質は、西欧近代への思慕をつのらせたが、僧林生活のなかでは抑圧せざるを

えなかった。漢詩作文は宝山の得意とするところであり、禅僧としての生活のなかでは、こうした詩境に遊び、あるいはむしろ積極的に詩偈をつくるのが許されたりが、反面、漢詩作文によって培われた詩情は、当時世俗社会に流行しつつあった西欧近代文芸への欲求をいよいよ潜在的に進行させていた。このことは、世俗社会へ転身後の同志社普通高校において、直ちに文芸活動のグループに身を置いたことでも判明する。

このような前途への不安と、現実への不満とがあったればこそ、兄の提言を容れて、比較的単純に還俗へ踏み切れたのである。

こうして宝山は、在家から沙門へ、そして再び俗人へと回帰した。しかしこの過程で、出家者としての生活体験を、とくに下積みの修行者としての「行」の体験を、十一才から十九才という比較的人格構造の柔軟な時期に、言いかえれば、一度水路づけられると永くその行動傾向を決定しがちな時期にもった意味は大きい。

宝山の禅の生活体験が、宗教的にどのような内容をもったかはわからない。証悟というようなことは勿論問題とはなりえないが、そのような価値的内容を離れて、のちのちまでも彼の行動傾向に影響を与えたと思われる僧としての生活期間、つまり「徹玄」として生きた期間を、宝山の生活史における

「聖」の部分と見なすことができる。

宝山は、この出家時代の曹洞禅に加えて、のちに臨済禅の体験をも持つに至る。しかしそれは、還俗後の居士禅であり、その関わり方は、あくまでも俗の立場から聖へのコミットであった。

ここに宝山の禅僧時代の生活を、彼の基層的宗教体験として規定するのは、「聖」社会として世俗から区別される生活様式を、ほぼ十年近くにわたって体験しているからである。そして、彼の生活のスタイル、思考形式のなかには、ここに遡源して理解されるものが少くない。これについては耐久学の教育方針が、禅の僧堂生活からの発想と関係するという点から後述したい。

知的世界拡充の情熱

還俗した宝山は直ちに上京した。知的要求を充たさんがための還俗であったから、即上京・修学という形式となったが、志のみが先行しての上京であったから、忽ち経済的に行きづまざるをえなかった。生家の森の状態は、彼に援助するほどの余裕はなかったのである。

明治十九年ごろは最も失意の中にあり、苦悶した時期であった。

しかしこの苦境を脱するために、宝山は大阪府下の宝山家の養子となり、名前も良雄と改名する。これによって経済的

事情は若干好転するが、それでもなお十分ではなかった。彼は悶々のうちに京阪地区を彷徨して打開の途を模索するが、その間に、同郷の先輩や友人である有識の金沢人との交際をもつに至るのである。

たとえば三宅雄次郎（雪嶺）、河村善益、北条時敬、早川干吉郎、山本良吉らの名前があげられる。これらはいづれも、後に日本近代史のジャーナリズム・法曹界・教育界・財界等の分野に著名な業績を留めた人びとであるが、三宅や河村が一時宝山を食客として遇したこと、また宝山が後々までも北条から「人の世話をする役になって貰いたい」言われたことを銘記していること等（¹¹）をみると、不遇時代の宝山に庇護者・助言者・相談者としての関わりがあったのである。こうしたなかで宝山は、のちにアメリカ留学の資金を援助してくれた最大の後援者、大阪の藤岡忠一郎とも出逢うことになる。

具体的に宝山にとっての修学モデルは、最も身近な兄外三郎が帝国大学に学んだコースであった。その目標実現の手がかりとして、まづ彼は同志社普通校に入った。明治二十一年二十一才のときで、晩学ではあるが宝山にとっては、正規の中等教育の第一歩である。

(一)同志社普通校時代（一八八八—一八九二）

仏門の修行生活のなかで抑えられてきた宝山の文筆の才能は、同志社普通校在学中、一きよに噴出したかの感がある。

「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向（松本）

同志社は組合派基督教会の新島襄によって、明治八年十一月同志社英学校として設立されたが、今日の基礎は、新島が再度の外遊から帰国して発表した「大学設立趣意書」（明治二十一年）によって固まった。

新島は明治二十三年同志社の発展をみることなく世を去ったが、彼がアメリカで身につけた自主独立の気風は、創業期から同志社の精神となった。

この校風のなかで宝山は、予備校課程を経て普通校一年に進学する。比較的年長者の多い同僚のなかで、忽ち一頭地をぬきんでる才幹を発揮した。加賀武四郎の回想によると、当時クラスのなかで行なわれた筆記雑誌の発行、定期的な作詩会や朗読会の企画や実施のすべてに宝山が推進者であった。また宝山は末広鉄腸の『政界未来記』に模して、『仏教未来記』という小冊子をものにしていた（¹²）と云う。

当時の同志社に学ぶものは、必ずしもクリスチャンとは限らず、未信仰者のなかには耶蘇教反対論者も含まれていた。還俗したとはいえ一度は僧籍にあった宝山は、在学中、新島の人格に深く共感と思慕を抱きながらも、遂に洗礼を受けるには至らなかった。

むしろ、このころの宝山は「栽松」と号し、心情的には仏教とくに禅宗への親和的態度を崩してはいない。言う迄もなく「栽松」とは、前世において牛頭山の栽松道者であったと

いう中国禅宗五祖の大満弘忍に因んだものである。

前述の『仏教未来記』も、今日ではその内容を確かめるすべもないが、思うに、彼が青年前期までの生涯をその中に埋没させてきた仏教界の現状を、改めて客観化対象化し、その前途を慮ばかった憂宗の一文ではなかったろうか。

いづれにせよ、ここにはリベラルな立場からの批判があり、宝山がすでにそうした文筆の余裕をもちうる世界に居たことを重視したい。こうして宝山は、水を得た魚のように旺盛な文筆活動を開始し交友の輪を広めていった。

宝山は誠実温厚、地味な人柄で世俗的人間関係のきりまわしは不得手とも思われる人物であるが、文芸の世界のごとき同趣好の人間関係ではむしろ積極的な行動者である。

その一例として、後年のことになるが、同志社普通校同窓生の親睦機関誌『洛陽子已会通信録』⁽¹³⁾の企画指導の悉くが、宝山に依るところ大であったということがある。

このようにして友人達から一目をおかれた宝山は、前頭部が早くから禿げ上ったその老成した風格と、僧籍にあった前歴とが重ねられて、友人たちから「栽松道人」とときには若干のユーモアをもって「栽松和尚」と評せられた。

明治二十五年三月、宝山が同志社を去って上京するとき、『同志社文学雑誌』三十五号は、「栽松道人に告ぐ」「栽松宝山君ヲ送ル」「送栽松道人辞」など、友人の敬愛と惜別の念

のこもった文章を掲載している。⁽¹⁴⁾ 因みに言えば「栽松」は自稱の筆名であり、彼は別に居士号「清拙」を、のちに円覚寺参禅の折、釈宗演から授与されている。

(二)東京修学時代（一八九三—一八九六）

沙門としての生活のため、正規の修学課程を履修しえなかった宝山が、おそまきながら世俗の学問に志し、苦節の末に選科とはいえ東京帝国大学に入れたことは、宿願の達成であった。彼は哲学を専攻するが、この選科は、僧堂での内省的な学道と、同志社における開かれた知的世界への関心を通して、かねてから温められてきた方向であろう。宝山が選科生として登録した明治二十六年の東京帝国大学文科大学の哲学科には、ドイツより芸術的感性の豊かな哲学者ラファエル・ケーベル Raphael Koerber（一八四八—一九二二）が赴任している。

宝山は、東都遊学中の一時期本郷西片町に下宿していたが、そこに同宿したのが山本良吉である。山本は同郷の金沢人であり、宝山とは以後終世の友情を交わしたが、同時に北条時敬を核として前述の西田や鈴木大拙とも親交のあった人物である。山本については、すでに本稿の姉妹論文ともいべき『教育者型人格における禅体験の受容と変容—自得・小山忠雄と晃水・山本良吉の比較考察』及び『晃水・山本良吉の宗教観』、『廊堂・寸心・晃水—比較宗教人間学的位相』に

おいて詳述してあるので、それにゆづりたい。⁽¹⁵⁾

ここで特に述べておきたいのは、山本は宝山より三年後の明治四年生まれであるが、第四高等中学校を中途退学し、その挫折感から立ち上るべく明治二十五年に上京、宝山より一年先きに帝国大学の選科に入学していることである。はじめ法科であったが、のち文科の哲学へ転じたため、宝山が上京して大学に入ってくるのと殆んど期を一にしている。つまり同じ教場で顔を合わせたわけであり、かつ下宿を一つにするに至っては、文字通り寢食を共にして学んだ仲間となった。

その山本が冷静な眼で宝山を観察し、次のように述べている。

私が君（宝山^註）と同じ下宿に居たのは二、三回あったと思ふが、そこへいつも最も多く尋ねて来るのは同志社の同窓であった。そして誰も皆非常に親しい、兄弟の様な交であった。東京に出て来てからできた友人も皆君と交るといふよりは君を愛するといふ方が事実に近い。君は幼い時から家庭的には可なり不幸であったらしい。しかしその不幸な境遇は君の醇良な美質を聯かも汚すことができず、君は醇良純心玉の如き性質をいつまでも保存された

私は随分誰とでも議論するたちであったので時々君に議論をふきかけた。議論は君の好む所でもなく、又長所でもなく、こちらが余り激しく出るといつも黙ってしまふ。

「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向（松本）

そしてすぐ他の問題もち出して気分を転換させようとした。君とはどうしても争うことはできない。⁽¹⁶⁾

少し長文の引用であるが、ここには宝山の人間像の一面が浮き彫りにされている。若干の美辞はあるが、常に何かを秘めて自制しているような理性的表情と、反面自らを空しくしても人につくす温かさを併せもつた宝山の人柄を、よく表わしていると思う。

そこで思い出されるのは、かつて北条時敬が第四高等学校を中退した山本の才能を愛しながらも、猖珣に傾くその性格を惜しんだ書を、彼の友人西田幾多郎に送ったことがある。

山本は自ら認めるように、誰とでも論争する性格の強さ・鋭さをもっていたのである。

これに対し宝山は、北条から「人の世話をする人間になつて貰いたい」と言われたという。これはきわめて重要な意味をもっている。北条は教育官僚として知られている以上に、いくたの有能な人材を育成した「人間の教師」¹¹「教育者」として有名である。つまり北条こそ、人の世話をした人間であり、包容力に富んだ大人であったことは、多くの友人や門下生が異口同音に語る場所である。それについては『廓堂片影』に多くの資料がある。また拙稿『北条時敬における人間と禅』、『北条時敬その教育者・禅者としての人間像』を参照されたい。⁽¹⁷⁾

この北条が、宝山に対して、あえて「人の世話をする人間であるように」と望んだのは、自らの生き方を宝山に求めたと言うことになる。むしろ北条と宝山との関係は、北条と山本の師弟関係の緻密さには及ばない。しかし宝山のパーソナリティは北条のそれに近いものがある。あるいはむしろ北条の方が、その親和性を宝山のなかに見出したと言うべきなのであろう。この共通項が、やがて宝山を教育者型人格として成長させてゆくのであるが、すでにその要素は山本が指摘するように、東京遊学時代の宝山のなかに胚胎していることわかる。

この時代の宝山は、単に学問を習得するに留まらず、広く自己の修養に心がけている。

その一つが、曹洞宗の僧籍を離脱して以来、久しく遠ざかっていた参禅の再開である。

明治三十年代、一部の知識人の間には居士禅の流行が見られた。その原因は種々あるが、一つには、文明開化の名のもとに急速に進んだ社会変化や観念的な外来知識の増大、自我意識の抬頭などに、何らかの心的対応の必要性が自覚されたことにもよる。そして、その自己コントロールの手法は近代的方法よりも、むしろ伝統的なものに求められがちであった。

もともと加賀禅の伝統がある金沢人の間には、上京後も居

士として参禅する者が少なくなかった。宝山も山本―北条（廊堂居士）というつながりから、北条の周辺で盛んであった鎌倉その他の禅会に接触する機会をもったものと考えられる。むしろ、そこには曹洞と臨済の相異こそあれ、かつて僧堂で修行した基層体験からの働きかけもあったであろう。

宝山が参禅した楞伽窟积宗演は、彼を評して「大学時代に始めて鎌倉に來り、私の禅関を敲かれ大の熱心家でありました」と言っている。⁽¹⁸⁾ 积宗演は今北洪川の後をうけて、明治二十五年三十三才の若さで円覚寺管長に就任、宝山がその門を叩いた当時は最も盛熟期で、沈滞気味の禅界へ盛んに新風を吹きこんでいた。前述したように宝山の清拙なる道号は、この折に与えられたものである。

その頃を消息を伝える『子已会通信録』の第二号には、宝山について「君は今冬鎌倉の禪園に遊ぶ」とある。⁽¹⁹⁾ 又第三号には「君（註、宝山）は俗に似て俗ならず、冷に似て冷ならず、胸中自ら閑日月あり」とし、「先日下旬鎌倉に赴き积宗演師に学ぶこと一週間余……」と記している。⁽²⁰⁾

また本郷湯島の麟祥院の参禅会にも熱心に通い、同院の天沢文雅の知遇を得、これが縁で、大学卒業後妙心寺の学林で教えることにもなった。

大学においては知的世界の拡大と共に、哲学・倫理・心理・宗教学等幅広く講義を聴いている。一方で、宝山は参禅

修養の道にも熱心に精進した。これは宝山個人の欲求に根ざした実践ではあったが、単発した個人的行動ではなかった。それは、禅会が単独な個人で営まれえないという意味ではない。

すでに述べたように、当時一部の人士に限定されるにせよ、知的向上を目ざすと同時に「修養」の意義を重視する社会的背景と伝統があった⁽²¹⁾。その生き方の実践道を、居士として参禅することに見出す者であったのである。彼らは、宝山に身近な山本をも含め、知的追求者としては彼の良きライバルであった。ライバルである限りは彼らに伍して、同じ修養の道も精進しなければ遅れを取ることになる。この意識・無意識的な切磋琢磨の緊張関係が、彼らを相互に「道友」と呼ばしめた。同志社以来の宝山の筆名「裁松道人」も、この時代には文芸的なものから宗教的なものへ、その意味を変えていたのではなからうか。

このようにして宝山もまた、この相互向上を競い合う人間の力関係のなかにあった。この力関係を無視して、宝山の宗教的実践活動を、単に偶発的ないし個人的恣意の行為としてのみ理解することはできない。

こうした力学的脈絡に結ばれた人間群像における宗教的行動の総合的比較は、本稿を含め従来発表してきた事例研究を併せて、後日を待ちたい。

(三) 妙心寺花園学林時代(一八九六—一九〇一)

明治二十九年七月大学卒業と共に宝山は、九月には招かれて臨済宗京都妙心寺の花園普通学林(四年制)の教頭に迎えられた。かねて麟祥院参禅会での縁故、天沢文雅の推薦によるもので、妙心寺執事兼学林総監の前田誠節の知遇によるところが大きかったと言う。学舎は龍安寺と仁和寺をむすぶ北山の半腹にあり、生徒は凡そ六・七十名、ほとんどが宗門子弟である。三十一年には東(岐阜県岩崎の靈松院内)西(妙心寺内)の両学林が合併した高等部(二年制のち臨済宗大学)にも出講し、哲学史、倫理学、心理学、比較宗教などを教え、明治三十四年に及んだ。

この間にポール・ケーラス(Paul Carus 1852—1919)の Religion and Science. 1893 を『ケーラス氏科学教』として訳出しているが、これはすでに東京帝国大学(選科)在籍から温めていたものであり、雑誌『如是』に一部掲載されたものを明治三十年に入って改訳補正したものである。恐らく学林での講義にも利用されたと思う。

ケーラスは『仏陀の福音』(The Gospel of Buddha. 1894)の著者として知られているが、ドイツ生れのアメリカの哲学者であり、シカゴ大学で教鞭をとっていた。その他の著作としては、The soul of man 1900, Pragmatism 1908 などがある。宝山が改訳補正に入った明治三十年、鈴木大拙は渡

米してイリノイ州ラサルのケーラスのもとにあり、中国文献の英訳を手伝っている。

ケーラスの哲学思想は一元論的実証主義の立場をとっているが、宝山はこれを、旧宗教の非科学性（迷信や不合理）を経験的事実にもとづく方法論によって、合理的に体系化するものとみなし、真理探究の科学的方法是、宗教の領域においても同一と考えた。合理的研究は宗教否定につながるものでなく、普遍的真理を信認することをもって、信仰となし、宗教とは、無限の疑問を限りなく究めてゆく義務を人類に教えるものとみている。これは一種の *Deism* である。

宝山がケーラスから受けた影響は、その宗教観と教育理念とに関連して考えねばならない。

ここで述べたいのは、当時としてはこのように目新しい学識を背景として、宝山の宗教観、教育観が形成されたということである。

花園学林時代の宝山は、授業の合間や課外に色々な話をして生徒の啓発に努めた。彼は好んで英雄や偉人の伝記に話題を求めているが、当時、高等部に学んで話を聴いた金仙宗淳によると、宝山の先輩や名士についての感話が多かった。たとえば新島襄・北条時敬・哲学者ケーベル等の名前が印象的だと言っている。また宗教史では基督伝にふれ、仏教学林に学ぶ青年僧をかえって啓蒙するところが大きかったと言う。⁽²²⁾

ところで新島、北条、ケーベルのいづれをとっても、宝山自身が大きな感銘を受けた人格である。宝山は、これらの人格を、理想的「人間の師」として仰いでいる。この人格像を教材として語っているということは、既成の教育の枠をこえて、彼自身も自由な立場からの人間教育を目ざしていたと言えることができる。

「思い出深き課外教育」とは、のちの宝山に、後述する耐久学舎で学んだ瀬藤象二（のち東京帝国大学工学部教授）の回想であるが、辟地の学校にあっても都会の学校に遜色ない学力を身につけることのできたのは、例えば「英語をもって単に語学の解釈にとどめず、英米国民の所謂国風を汲み、如何にして興味を以て学習すべきか」を説かれた、その「興味深い教授法に負う所が多かった」と言っている。そして教育者としての宝山に、瀬藤が学んだ第一高等学校新渡戸稲造校長の国際的感覚に富んだ人間像との共通点を指摘している。⁽²³⁾ こうしたリベラルな教育方法は、私学の学林であったからこそ可能なのであり、「人間」教育への念願は、遡ってこの花園学林時代に、彼の人格内に体制化されたと考えられる。つまり生活のための「教師」としてよりも、自らの理想実現のために教える「教育者」としての生き方を固めつつあったと思う。

教育者としての自覚と自立

宝山における「教育者」としての自覚的行動の具体例は、赴任間もないころの次の一連の文章にみられる。⁽²⁴⁾

(1) 妙心寺派普通学林に図書館の必要を論じ、併せて其の設立の方法に及ぶ。

(2) 仏教者の覚悟如何。

(3) 妙心寺派教育の振興策を論ず。

(4) 謹みて書を本派興学会委員諸大徳に呈す。

すべて共通の課題を内容としており、(4)に「明治三十年二月四日夜半草之」とあるところをみると、これら一連の文章は着任直後、花園学林の現状に黙視できない問題の多きことを次々に訴えたものと思われる。

(2)は、やや例外的で、妙心寺一派の問題にかぎらず、当時の仏教界全体の危機を警告し、その覚悟を促している。

それによると、廃仏毀釈、耶蘇教解禁とさまざまな打撃を蒙ってきた仏教界であるが、今日まさに直面している重大問題は、旧宗教の抹殺論、万教帰一的な諸宗教統合論、完全に合理的な新宗教創始論の三説に、いかに対応するかであり、仏教者にその覚悟如何と言うものである。

生硬で術学的なきらいもある文体は、時代を考えれば止むを得ないとしても、この文中に言わんとするところは、かつて自らが仏教者であった宝山自身に突きつけられるべき刃である。これを裏から言えば、宝山はその修行時代から、内な

る立場で、日本仏教界の不振沈滞の現状を痛感していたことになる。

そのことを、外部者として今改めて仏教界に覚醒を求めているのである。したがって、単に危機感を煽るだけではなく、危機打開の最善策として、真人物の育成つまり僧侶教育の必須にして急務なことを提言している。

その具体案は、彼が現に直接関係する妙心寺本派内の問題と必然的にかかわってくる。

その一つが図書館設立の提言である。宝山は学林改善の大柱として、校地の改善、優秀な教師の増員、普通学監の採用をあげているが、より急務な問題として図書館設立を強く主張している。図書購入費の捻出法、書籍蒐集の便法など独自の案を考えて、学校用地や人事等の管理経営の面より、図書館設立を最大急務としているところに教育者宝山の面目がある。

不立文字をたてまえとする禅門では、しばしば読書が軽視され、ために学林と雖も図書設備の貧弱なところが少くない。宝山は身をもってその弊を痛感したのであり、その思いのうえに立って、現実の職場に図書館の設立を要請したのである。その目的は、単に教授効果の功利性にあるのではなく、生徒に「自発的、自判的（註、自主判断的）、自修的精神」を養成するにあった。彼は一方的な「注入主義教授法」を最

も嫌ったのである。

この己れの体験した不幸は、後進に味わせないとする老婆心、自主自立の精神の育成に教育者宝山の姿勢を見ることが出来る。

宝山は、僧侶教育の第一課題は、大衆を教化しうる優秀な布教伝道者の育成にありとする。そこで(3)において、布教者としての僧侶教育の内容にふれている。

それによると、日進月歩の時代の布教者としては、閉ざされた仏学の世界のみにこもることなく、すべからず世間一般の教育水準を上まわる知識や教養を身につけねばならない。そのため布教者教育の実際には、倫理学・心理学の成果を盛った教育学の方法を導入せよという。今日から言えば、いわゆる人間学的視点を導入するということであろう。当時の仏教伝道といえ、とかく因縁話などの説法が多かった実状を考えると、すでにその限界を予見した卓説である。

……本派は不立文字を以て宗とす。何ぞ知解分別を事とせんや、且つ夫れ知解分別は見性の障礙たる因縁なりと。嗚呼果して然るか。……中略……見性を容易にせんがために教育を排斥するは、所謂消極的の事にして到底大英傑の養成を望むものにあらざるなき歟。

蓋し本派已に教育令あり、已に普通学林あり、固より這般の事、明白なりと信ず。然れども若し果して諸大徳にして普通教

育の必要を知り、教育令を奉じ、以て普通学林最終の目的を達せんとせらるるならんには余は更に諸大徳の鋭意奮発して、実地に其効績を見る事を務められんことを願ふなり。良田を耕耘して美穀を得んとするは万人の望む所なるも、事実之が耕耘を為さずして美穀を得んとするは寧ろ愚に近からずや。⁽²⁵⁾

右は、宝山が、知解分別を原則とする学校教育を、見性の阻因と見る宗門伝統の考えに対し、教育令に則った普通学林の教育充実を通して、広く深く耕耘しなければ真の人材育成は期しがたいことを主張したものである。

彼はこの主張を、(4)において、当時普通学林拡張を審議していた興学会委員の諸大徳に対し、最も重要なのは外観ではなく、内なる整備であることを訴えた。

「凡そ出藍の才を出し、天下有用の人物を養成せしものは、必ずしも宏壯輪奐の校舍に非ずして、却って敗簷破壁の小塾にある⁽²⁶⁾、このことは、教育は人にあること、つまり人と人との関係であり、人と物との問題ではないとする宝山の教育観のあらわれである。

このような提言や自己主張をする宝山は、同時に妙心寺派教団および妙心寺花園学園で定められたことを謙虚に遵守する人間であった。主張すべきことは主張し、批判すべきことは批判するが、行すべきことは必らず行ずるという生き方である。宝山の、この姿勢の正しい生活態度のなかに、人びと

は禅的なものを感じるといふ。「禅的なもの」といふのはきわめて曖昧な表現であるが、二、三の例をもつて説明したい。

宝山の家に下宿をし、家族同様の生活を許されていた一学生は、

「先生の喫茶喫飯の間に於てとられる所作が益々禅化し殆んど禅坊主的であるのに感服しました」と言っている。⁽²⁷⁾ 僧堂における食事作法を体得した者は、日常生活にてもその基本動作は、意識的にそれを放下することがない限り、おのずと生きているであろう。宝山家の朝食は白粥と言われているが、これもまた禅林生活の名残りを、世俗生活のなかに留めているものである。魚を食べた後の骨は、そのまま捨てることなく、皿に受けて熱湯を注ぎ、よく攪拌して飲むべきものだ⁽²⁸⁾と周囲に教えていた。粗食で修行した時代の体験が、のちのちまでも生きている。

また、妙心寺派管長小林虎関が花園学林で提唱した折、宝山はモーニング姿で教職員席の最前列に端座、真摯な態度で合掌し唱えごとを口誦していた姿は、他の一般教員にも感銘を与え、学生の目には「真に禅的生活に常住せられる」ものと映っている。

こうしてみると、如何にも謹厳そのもののように感ぜられるが、そのモーニングは「大枚参円をはたいて中古品を求め

たのだ」と或る折に呷らし、聞いた者を驚かせた。そこに「恰も禅宗の古尊宿の如き風があるのに益々敬虔の念を深めた」といふ。⁽²⁸⁾

こうした瑣末な例証をもって、宝山における「禅的なもの」を説明しえたか、どうか疑問である。しかし、ここでは「禅的なもの」の内容を、禅的に納得することが重要なのではない。重要なのは、宝山の日常生活に「禅的なもの」を感じとった人が存するという事実である。つまり宝山が、そのような感じを人に与える人格だということである。

すでに曹洞沙門の還俗者である宝山が、臨濟妙心寺派学林の教師として、なお人びとにそのような印象を与えている。

先に述べたように宝山は、学林の改善、僧侶教育のあり方など種々宗門内に関係する問題についても発言しているが、基本的にそれは教育者・宝山としての発言であり提案である。ここに宝山の教育者として自覚と自立をみることができ、同時に「禅的なもの」を人に印象づける教育者としての人格とは、何であろうか。聖・俗にかかわる彼の人格構造は後節において考えてみたい。

(四)アメリカ留学の時代(一九〇一—一九〇三)

明治三十四年七月、宝山は支持者藤岡忠一郎の援助により、米国留学の途に上った。大学卒業とともに一応修学課程を終了した宝山は、五年間花園学林の教壇に立ったのち、今

度は東都遊学以上に更に広い世界への知的挑戦をこころみたのである。留学のことは、夢としては早くよりあったらしい。しかしその実現は不可能と思われていた。それが思いがけなくも達せられたのであるから、その喜びは言うまでもなかった。

しかし当時宝山は三十四才、すでに家庭人であり、必ずしも頑健とは言えない身体と、みづからの語学力を考えたとき、不馴れな外国での生活と長期間の研修には、前途の多難が慮ばかれた。それを押し切つての鹿島立ちは、いかに彼の知的欲求が旺盛であったかを示していよう。宝山には、禅・儒を基盤とした漢学的素養のうえに、同志社普通校および帝国大学選科時代に培った西欧的知識があったが、なお未知なる世界的視圏への魅力が彼を引きつけて止まなかったと言える。

同船の仲間には同志社出身の村田勤、西池成義らが居り、山本秀煌や天岫^{てんきう}接三その他の日本人留学生がいた。宝山はアメリカ到着と共にニューヘブロンに直行し、エール大学入学の手続きをとった。当時エールには、仏門出身の柴田一能（日蓮宗、のち慶応大教授）、山崎快英（曹洞宗）がおり、のちには前記の天岫も合流してきて、宗教や哲学を学ぶものが多かったという。

哲学科に籍をおいた宝山が、留学中最も影響を受けたのはラッド教授（George Trumbull Ladd 1834—1921）である。

ラッドは、新カント派の先駆者とも言われるロッツェ（Ru-dolpfa Hermann Lotze 1817—1881）の影響を受けた。ロッツェは思弁的な観念論哲学と、当時抬頭しつつあった自然科学的な機械論との統合をこころみたが、この統合の過程も、実は神が最高善を実現するための手段とみる新形而学を唱えた。ライプニッツ（Gottfried Leibniz 1646—1716）のモナドのごとく、世界は多数の精神的单子から成るが、この統一に神を認めたのである。

ラッドは、このロッツェ形而上学の影響下に、宗教的・精神的一元論を唱えた。彼はエールの教壇に立ち、その著には、*Elements of physiological Psychology*. 1887, *Pilosophy of the Mind*. 1895, などがある。

宝山は、このラッドから学問上の恩恵を受けると共に、それ以上に人間としての大きな感化を受けた。

ラッド夫妻は、きわめて親日的な米国人であった。オハイオ州の出身で、当時六十才に近く、すでにエール大学では二十年近く教鞭をとっていた。

宝山の記すところによると、夫妻は、ニューヘブロン市プロスペクト街の大学とイースト・ロック公園にはさまれた閑静な土地にある赤練瓦三階の建物に住んでいた。家の前にはエールの大樹が葉を茂らせ、庭には沢山の果樹があった。室内には、教え子から贈られた日本の美術品が飾られてあったと

言う。

ラッド夫妻は敬虔なプロテスタントで、日曜には必ず教会で説教を聴き、夜は自宅に日本人学生を集め、コーヒーをすすめて懇談する時間を設けた。宝山もそのなかの一人で、ときには晚餐を共にしたこともあった。明治三十五年、ラッド夫妻がヨーロッパ旅行をした四カ月間、宝山は友人と共に留守宅管理を任せられたこともあった。⁽²⁹⁾

こうしてみると、いかにも古き良き時代(die gute alte Zeit)の学生生活に思えるが、また宝山を含め多くの日本人留学生が、学費節約のため安宿に泊まり粗食に甘んじて、不安と焦燥の中に勉強していたのも事実である。この点については、柴田一能の回想文がよく語っている。⁽³⁰⁾

こうした明暗もごもの留学生活であったが、ラッド夫妻との交流を通して、宝山はプロテスタントの家庭における節約、勤勉、自立、奉仕、人間の愛といったものを深く感得する機会を得た。

博士(註ラッド教授)は常に十分前生徒に先^まちて教室に入る。冬の日の午後四時には大講堂は早や薄暗きが故に、博士は自ら立ちて黒板の両方に瓦斯^{がす}を点火し、黒板に向って講演の題目及び要領教項を書く。而して尚二三分を余すや瓦斯管を細めて火光を最小にし椅子に依りて生徒の満つるを待つ。やがて再

「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向(松本)

び立ち火光を大にする時講堂外の大時計は正四時を報ず。此の時直ちに口を開きて講を始め、正五時の鐘の響は即ち口を閉ずるの合図なり。一年数百万弗を費す大学校に於て、唯二箇三分間の瓦斯を惜むは豈に大なる儉約ならずや。一時間の講義を前一分間も濫りにせざるは豈に大なる勤勉にあらずや。其他の事推して知るべきなり。⁽³¹⁾

右は、明治四十年京都大学での講演を機に来日したラッドを、耐久学舎に迎えた折の宝山の挨拶中の一文である。ラッドの禁欲的合理主義はよほど宝山に感銘を与えたらしく、彼は折にふれてこの事を口にしていく。

しかし、この物も時間も大切にし、刻々を精進して弁道せよとは、かつて宝山が身をおいた曹洞教団の宗祖道元もまた説いたところではなかったろうか。十一才から十九才まで約九年間の星霜を、曹洞沙門として過したにもかかわらず宝山には、不思議と宗祖の語録の引用がない。

むしろ、文字が本質的な重要さをもつのではない。それに捉われるのは邪道とも言える。

しかし宝山の言行に宗門の教義上の引用がないということ、先にも述べたように若年時の彼の修行が、文通通り「身体」で行じなければならなかった「行」であって、文字と言葉によって表詮された思想や教理の世界ではなかったからで

あろう。

言いかえると、最も原初的な身体経験としての「行」であったからこそ基層に残り、観念的媒介を経なくても、直に身体ぢまの記憶の方からラッドに共鳴しえたのである。

だがしかし、すでに原初的体験の場から離れている宝山は、留学生として世俗者の立場からの共感だと意識している。基層の宗教体験があればこそ、感動的に受けとめられた世俗の体験であることを自覚せずである。

明治三十六年、宝山は長期の海外生活から強い郷愁に襲われ、五月留学期間を繰りあげて退学、ヨーロッパ各国（英・仏・独）の中等教育事情を視察して、九月十六日帰国した。

三 人格構造の特色

ここでは問題処理を容易にするため、聖・俗の概念を使用したい。ここで聖とは、具体的に世俗生活から区別された宝山の沙門生活の実体をさす。

上来した宝山の生いたちをみると、在家から身を起して出家、ほぼ九年の僧生活の後に還俗、世俗生活へ復帰している。聖・俗の関係で言えば、俗↓聖↓俗の単純な図式となる。一般的にこの図式の意識過程には、回心（ないし発心）、逆回心、あるいは一種のコンファーマイションもその間に介在するであろうし、形式的には、それぞれにつき或る種の儀

礼や手続きを伴うこともある。⁽³²⁾

宝山が属した曹洞教団では、得度（上座）によって始まり、立身（座元）、瑞世（和尚）、建法幢（大和尚）という過程を踏むが、十九才で還俗した宝山が、この宗制の過程をどこまで修行したかは判らない。彼自身も自らの沙門歴については何も語っていない。恐らく上座の分限で終わったのでなかろうか。

いづれにしても今ここで問題となるのは、そうした宗制上の分限形式ではなく、世俗世界から区別された生活時間の長さ、行動範囲の広さである。その長さと広さのもつ意味において、宝山の沙門としての修行生活が、彼の基層的宗教体験たりえたであろうことはすでに述べた。

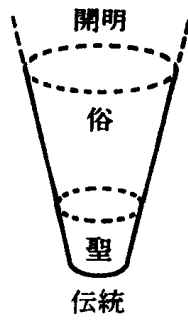
しかし基層に宗教体験をもちえたことが、必ずしも宗教的成熟を意味するものではない。むしろ基層にとどまって顕在化表層化しえないことは、ある意味で成熟への限界を示すものでもある。基層体験は、ときには顕在化して、行動にまで発現するか、表層意識に影響を与える可能性を秘めているということで意味がある。

しかし宝山は、基層体験のもつこの意味を自覚していなかった。これはむしろ第三者的立場からの観察によってのみ知られうるもので、当事者といえども自覚できるものではないからである。

宝山の還俗が、兄外三郎の説得に応じてのリタイアー（撤

退)であって、積極的な放棄でなかったことに注目したい。彼は他の宗教価値をえらんで、そこへ転向したのではない。見通しのたない修行生活から、再び世俗の社会へ復帰したのであり、放棄すべきほどのものを修行生活を通して擱んではいなかった。修行生活そのものは、彼の人格の基層に痕跡のみを留めた体験であり、しかもそれすら自覚されていない。自覚されないものは放棄の対象にもなりえないから、還俗後も宝山の人格内には、基層体験としての「行」の痕跡は残ったと思わざるをえない。

こうして宝山の世俗的人格は、単に俗↓聖↓俗の単線直進的な変化の帰結ではなく、聖・俗複合した構造をもつ。しかも聖・俗のバランスは、教育者としての世俗的人格においても、なお聖の比重の強さのために、左のような形式に図示されよう。



このコップのような奇妙な図は、基層体験としての聖なる時間と空間を基底にもった還俗後の宝山、つまり教育者宝山という世俗的人格を示す。上方すなわち未来に向って、世俗的価値受容の可能性を拡大している。その間口の広さは、後述するように教育という世俗的価値実現への積極的意欲をあらわす。その世俗的価値の追求は、同志社普通校以来とくにエール大学留学を機に、短期間

とはいえ、英、仏、独の旅行を通して著しく欧米近代への関心を強めている。明治中期という時代を考えれば当然のことであるが、そうした時代背景を考慮しつつ、なおこれを宝山の人格構造の一つの特色とみるのである。

基底の方に細まった部分は、かつて彼が体験した修行生活、聖なる領域を示す。点線で上方部と区切られているが、実は遮断はされていない。還俗という宗制上の手続きによって、この部分からリタイアした形式ではあっても、なおこの上に彼の人格の上部構造が乗っているのである。年代の量的比重は少いけれども、質的比重の強さのために、それは世俗の一部を支えているのではなく、狭い面積の底がラップ状に上へ展いて、そのすべてを支えていることが特徴である。

それは宝山の幼少時から青年前期にいたる間の、最も始原的な、そして身体「行」としての体験領域であり、具体的には、禅林の清規にのつとった生活様式、行動形式の世界であり、上部の近代的・開明的価値志向に対して、伝統的規範の保持墨守の働らきのうえに立つ。形としては、きわめて不安定であるが、この働らきがある限り崩壊することはない。近代化とその反動と、時代は正に相反する二大思潮で激動したときであったが、宝山の人格内にはそうした矛盾相剋は見られない。

教育者つまり世俗人・宝山の教育理想は、あくまでも世俗的行動様式で追求されたが、その行動様式は、意識・無意識

のうちに基層体験の行動様式に連動させられていた。われわれは、これを安易な妥協や折衷とは見ない。彼は右の行き方を理想的教育の道として、強く主張したのである。そのために種々の提言をし、時には周囲との軋轢もあった。帰国後の宝山は名利を求めることなく、進んで僻村の一私塾に赴任したのも、自ら信じる理想的教育実現のためであった。

その例を、耐久学舎を中心に、教育者・宝山における聖俗の行動傾向として見てみよう。

四 耐久学舎と宝山

耐久学舎の歴史

今日、一見しただけでは、このリガラスな時代があった名前に、奇異を感じる人も少くないと思う。

現在この名前は、学制の変遷のはてに和歌山県立耐久高等学校（有田郡湯浅町）と、広川町立耐久中学校（有田郡広川町広一・二三）に残っている。第三者には一見奇異な感のある校名を、いづれも伝統あるものとして誇りにしている。⁽³³⁾

しかしその淵源は、嘉永五年当時の広村に、土地の先覚者浜口梧陵（一八二〇—一八八五）らによって設けられた文武の私塾・稽古場と呼ばれるものに遡る。

浜口については詳細なる伝記『浜口梧陵伝』（楚人冠・杉村広太郎著、以下『陵伝』と略⁽³⁴⁾）があるので、それに譲りたいが、

その人柄は、耐久学舎の性格に深く関わっているので重要である。概要を述べるならば、彼は文政三年の出生である。本家浜口の家督を継いで儀兵衛を襲名、銚子における家業醤油醸造業を発展させて、後のヤマサ醤油の基礎を築いた。幕末には紀州藩の藩財政改革に参加し、廃藩置県後は和歌山県大参事、のち初代県会議長となった。若いところ蘭医三宅良齋に洋学を学び、佐久間象山、勝海舟のちには福沢諭吉とも交わって、国防や民政に関心をもち、他方、郷党の育英事業にも尽力した人物である。国際的識見にも長じ、明治十八年海外視察の途上、ニューヨークで客死した。安政元年の大海嘯に際し、村民救済につくした梧陵のことをモデルとし、ラフカディオ・ハーンが *Living God* を書いたことはよく知られている。⁽³⁵⁾

耐久社はこの浜口梧陵によって設立された。広村は甘橘類や醤油の産地として、俗に「広千戸」の殷賑を見せていたが、相つぐ地震と海嘯によって寂れ、当時は半農半漁の小村であった。慶応二年、衰微した稽古場を大道^{みち}の地に移転増築するに当って、この育英事業が、久しく持続するよう「耐久」の名がつけられて再出発したのが事実上の起源である。元来、修武の稽古場も兼ねていたので、社生に対する規則は厳しかった。当初は微々たるものであったが漸次発展し、耐久学舎として地元の青年たちに、漢文、英語、数学等の一般

普通教育を行うまでに成長した。維持費は歴代の浜口家の当主や他の地元有力者の出資によって賄われた。

明治三十九年、新校舎を西の浜に建設して移転、四十一年には、中学校令による私立耐久中学として、同地方唯一の中学校となるが、宝山がここに赴任したのは明治三十六年の夏であり、その一年前は、平家建一棟を四室に分けて使用した教師三名、生徒二十数名の三学年制私塾、耐久学舎でしかなかった。

耐久学舎の宝山

耐久舎は、正規の学制の枠外にあって、一小村の私学として地元青年の教育を目ざしたものであり、規模も内容も当初から完備したものではない。しかし漸次普通教育への内容がととのうと共に、経営者は然るべき教育担当の責任者を選定することとなり、その白羽の矢をまづ杉村広太郎（一八七二—一九四五）に立てた。

杉村は明治五年生れの紀州人、鎌倉円覚寺に参禅し無懷居士と称していたが、京都本願寺文学寮舎監を経て、明治三十六年朝日グラフ主幹となり、楚人冠の筆名で論陣を張っていた。僻村の私塾の長と、当時のジャーナリスト杉村の社会的活動の場とを比較したとき、その人選の規準が如何にアンバランスであるかが判るが、取りも直さずそれは又、如何に経営者たちが、耐久舎に優れた人物を望んでいたかの証左でも

ある。

杉村はこの依頼を断わると共に、アメリカから帰国早々の宝山を、自分の代わりにと推輓した。

当時の宝山は、私立中学校の経営に理想をもっており、その実現を京都に求めていたが、計画の困難を知って杉村のすすめに応じたと言われる⁽³⁶⁾。いづれにしても宝山は、こうして未知の土地紀州有田郡広村に、耐久学舎の長となった。

彼の任期中（一九〇四—一九二二）、校舎の増築整備、職員を増員、附属施設の充実など徐々に進行し、明治四十年十二月付官報で、五年制私立中学校として許可されるまでに発展した。

しかし、こうした外観的發展以上に、見るべきものは宝山独自の教育方針である。

彼は、自らの教育理想が依って立つところにふれて、次のように述べている。

余の学校や生徒僅かに三百余名、職員亦二十名に満たず。紀南の一角に辺在して寥々たる一小事業、国家社会の大勢には何等の貢献する処なきに似たり。然れども余の信ずる処、日夜心上に浮動し居るものは、一箇雄大なる理想なり。其内容は敢えて語るべき限りにあらざれども、此理念は余が相国寺辺に数年の生活を送りし間に得たるものなり（傍点筆者）

また、次のようにも述べている。

余は常に同志社を紀南の一角に建設せんとつとめつつあり。新島先生の精神の一片を山海の間に磅礴ほうぼうたらしめんと頗る困難なるに際会する毎に先生の精神を想起せずんばならず……中略……耐久中学校の名が世に喧伝せらるる事が校舎の大にもあらず、生徒の衆多にもあらずして精神教育の面影を存するにありとすれば、それは全く余が母校に負へる処のものに外ならずとす。⁽³⁷⁾
(傍点筆者)

文中の「相国寺辺に数年の生活」とは、言うまでもなく臨濟宗相国寺派大本山相国寺をさすが、この語は、宝山の京都時代における禅的生活環境を言うのではなく、同寺の所在地上京区今出川通り烏丸に接した同志社（普通科）在学時代を意味している。こうしてみると、右に引用した二文からして、彼の教育理念は、一に同志社及び新島襄に負うている。そして同志社生活の延長先にエール大学留学があったとすれば、教育理念もまたエール時代及びそこでのラッド夫妻との出逢いを看過することができない。これは、宝山において最も自覚されていたことである。

こうしてみると宝山の教育理念は、基本的に同志社在学時代—アメリカ留学時代を通じて培われた。そこには、開かれた知性による教養主義と、プロテスタント的な生活倫理があり、更にそれらを合わせたところの人格主義の人間教育観が

ある。

有名な人間よりも社会に有用な人材を望む。そのためには、空論の徒よりも実践的人間を育成する。労働の尊さを教えるべく、運動や作業を重んじ、それによって独立自営の精神を培う。情操教育を重んじ、そのために豊かな趣味や高尚な教養にふれる機会を設ける。道義を正し、他にも自にも恥ぢぬ自信のある生活を生きる等々の内容を、宝山は次の四ヶ条に集約している。

(一)実用的学問による教育、(二)優美な情操の涵養、(三)勤労による体力の増進、(四)良心と信頼の確立である。これが更に凝縮されてスローガンとなったのが、真・美・健の抽象的な価値概念である。宝山が長となって赴任した学校のほとんどに、真・美・健に係った校訓がある。現在の耐久高校、同中学は勿論、宝山の終焉の地となった最晩年の勤務校・旧福岡県立小倉高等女学校（現・北九州市小倉西高等学校）においても同様であった。⁽³⁸⁾

真・美・健は、言うまでもなく論理学・倫理学・美学が究極とするところの普遍的妥当価値の真・善・美にヒントを得て、一部組み変えたに過ぎない。彼はこれに Head. Hart. Hand を対応させ 3H として説明するが、通俗的とも感ぜられるこの組み変えの中で、善が健に代えられたことは意味がある。

「健」つまり Hand に象徴される肉体を勞しての諸行為、労働・スポーツ・作業等の一切は、身心を練磨し、強健な独立自營の精神を培うであろう。彼は、この事実をアメリカのハイスクールをはじめヨーロッパ各国の学校教育の場で見聞してきた。「健」によって代わられた「善」の価値は、高い知性と豊かな情操を培養することに加えて、運動やスポーツ等の実践を通して実現できると考えていたのである。決して「善」を捨てた訳ではない。だがしかし「健」、肉体を勞して活動すること、つまり実践の重視は、何と言っても宝山教育の特色である。

耐久学舎における具体的実践教育の内容は、後記の附録資料によって承知されたい。⁽³⁹⁾ここでは若干の例にとどめる。

耐久学舎では、生徒が使用する教具や教材の殆んどを、生徒の実修によって作った。大は机から小は齒磨やインキの類にいたるまで、学習課程のなかで作られた。例えばインキの製造は、化学実験の一環とされ、教育を知的理解と実践の統合として捉えている。

こうした教育視点は、学校農園での栽培や養鶏、氣象観測、工作活動などの万般に一貫した。

課外行事によって知識や情操の拡充に努めたことも、また大きな特色の一つである。正規の授業以外に、毎日の朝会では、その折々の機会を捉え、感銘をもって聴かれるよう現

実に則した話題の講話を大いに活用した。朝会は単なる集會にとどまらず、同志社等の宗教系学校にみられる *mornig service* にヒントを得たものと思われ、精神陶冶の意義が強調された。それと平行してまたユニークなのは、毎月一、二回は行なわれた祝祭会である。祝祭会は、その月の歴史上著名な人物の誕生日や忌日、或いは歴史的事件の記念日に因んで講話を行ったものであるが、日本歴史上の問題だけでなく、広く世界的視野から取材しており、プラトンやニュートン等のほか、ワートルローの戦いなども取り上げられた。英雄や武将の伝記も好まれたが、学問や芸術の世界で偉大な業績を残した人物が特に取りあげられている。しかも毎回、教師と共に生徒が二名づつ感想を発表した。

いかにも明治文化のもつ或る時代相をあらわしているが、同時に、その文化のなかにあった宝山自身の傾向をも示している。

すでに時代の潮流は、日露戦争から戦後にかけて現実を直視する自然主義の傾向を強めていたけれども、なお宝山に代表される新婦朝者の発言は、人びとを魅きつける力をもっていた。況や南紀の一海村においておやである。

宝山は、留学中に目撃した質素な生活のなかにあっても高尚な本を読み、音楽を楽しみながら心豊かな生活をしてきた老いた勤労者夫妻の姿に感動し、帰国後、それを理想の生き

方として語ったことがある。⁽⁴⁰⁾ 言わば「暮しは低く思いは高く」のピュリタンの価値観を是としていた宝山は、そこに流れる自主独立の生き方をも、教育対象の理想像とした。

宝山の教育には、祝祭会に代表される精神的感化に訴える面と、これに対するきわめて合理的・実用主義的側面がある。合理的・実用主義の教育方法は、生徒を全面的に信頼することによってのみ成りたつ冒險的なものであるが、宝山が敢えてこれに踏みきれたのは、自らの方針で信頼するにたる人間をつくり出しうるとの信念があったからである。

彼の合理的実用的・教育の一例は、何といても特色ある寄宿舎生活の実態にある、耐久学舎の寄宿舎生は、掃除、食事（作ることも含めて）、来客の応接、事物管理にいたるまで、すべて輪番制により自主的に運営することが任せられている。そのために寄宿舎には雇用人も必要としなかった。門限のごときも一切規則で制約することなく、生徒の責任ある自律心に一任されていた。また学生自給の「労働会」をつくり、舎内の労力はすべて生徒の手で解決し、その資を生徒に役立たせた。

このように宝山の教育方針は、基本的に自学自習であり、自主自律にあった。

いまだ江戸時代以来の儒教が、倫理規範としての余力を失ってはいなかった時代である。また国家は教育勅語による国

民（臣民）道德の規範を強制していた。宝山自身も儒教についての造詣は深い。彼が孔子論の著述に情熱を抱いていたことは知られている。しかし耐久学舎経営の理念は、儒教的合理主義以上にリベラルな面があり、むしろプロテスタントの精神に近い。そのリベラルな面は、本質的には国家的要請である教育勅語になじまないものがあつたらう。少くとも、そうした印象を第三者に与えるものはあつた。宝山自身はそれに気づくことなく、忠実な体制内教育者であつたが、しかしそれでも、そうした国家的要請から自由でありたく、私学教育を最初から念願したのである。

五年前より余来り本校の事務をとるや或人は泰西の教育法を此に移すは不可なりとして批難せられたり。想ふに本校の校風は一面よりは泰西の某校の模倣とも見ゆれども、一面よりは五十年來継続したる流風余韻とも見ゆ。蓋し洋の東西を問はず、人物養成の極意は二致なきものなるを知るなり。吾人は今尚ほ本校の歴史を研究しつつあり、同時に泰西の最新教育法をも探索しつつあり。其の研究の結果と日々の経験とは相頼り相俟ちて益々理想の校風に近づかんことを期す。⁽⁴¹⁾

ここには、洋風教育法の導入として非難された宝山が、それに屈することなく、むしろ更に西洋の最新教育法を探索し、その成果を耐久学舎の伝統に生かすことによって、理想

実現を期しうるといふ自信を見ることができるといふことができる。

耐久学舎は、宝山を中心とした関係者の努力によって発展し、明治四十一年には県立五年制中学に成長する。この間にあって、明治四十年、来日中のかつての師ラッド夫妻が広村の耐久学舎を訪れた。

ラッドは、その前年に京都大学での講義のため来日、多忙な日程を割いてわざわざ訪ねてきたのである。校主浜口吉右衛門以下地元広村の有志、和歌山県庁あげての歓迎となった。この間の模様は『ラッド博士来校誌』として、宝山の伝記に収録されてある。その五年ぶりの邂逅には、主・客が入れかわったとはいえ、かつての師弟間の厚情がこまやかに再現されている。

明けて四十一年の十一月二十二日、文部大臣小松原英太郎が視察して、耐久中学の実績を大きく評価した。地方の一小私学にとっては破格の面目を施し、そのユニークな人間教育は漸次世間の眼をひきつけるに至った。これを機に、耐久校を訪れる名士が多く、村に居た岩崎勝は往年を回想し「山本良吉先生、森外三郎先生、村岡理學博士、水野工學博士、藤岡文學博士、さては釈宗演禪師など（以下略）書き列ねるさへ快感を覚える」と述べている。⁽⁴²⁾

しかしこの世俗的名声の拡大は、宝山にとって必ずしも栄光のみではなかった。漸次規模が膨張すると共に財政が逼迫

し、経営をめぐって理事者側と意見が分れるようになった。

宝山の耐久時代五年間に、彼の家庭には二男一女が出生した。しかし南国の香木・樟に因んで名づけられた末子の樟二は、生後八ヶ月で夭折した。亡児の香華料のお返しに、宝山は人体模型のガラス・ケースを耐久中学へ寄贈している。こうした悲しみに加えて、彼の妻は産後の健康が思わしくなく、学校の問題と家庭内の世話で、宝山は心身を労したと思われるほど、財政に苦しむ経営者とのギャップを深めることになり、その間にあって宝山は、神経を磨りへらして遂に明治四十五年の夏、耐久中学を辞することになった。

その後の宝山は、山形県立庄内中学校（一九一四―一九一七）岐阜県立岐阜中学校（一九一七―一九二二）三重県立津中学校（一九二二―一九二五）福岡県立小倉高等女学校（一九二五―一九二八）の各公立中等学校長を歴任した。この間の教育業績をみても、彼が理想価値とした真・美・健への信念は変わらなかった。形式を変え表現に変化はあっても、本質的には一貫した。終焉の地となった小倉高等女学校においても同様であり、その伝統は現小倉西高等学校の校訓に継承されていることを過日知ることができた。しかし宝山の自主自律の教育方針は、私学であってこそ可能であり、管理規制のきびしい公立学校では、十分発揮することは不可能であつたらう。

教育とは本来自由かつ自主自律であるべきであり、それを許容できない公立教育に欠陥があるのか、公立教育の場に発揮できない宝山の教育理念に限界があるのか、大きな問題ではあるが、本研究の主題から外れるので、ここでは取り上げないことにする。

宝山良雄は、昭和三年五月二十三日、前年末の腎臓病が悪化し、小倉高等女学校校長の現職のままに逝去した。享年六十二才。五月二十五日学校葬が営まれた。裁松院耕月自然居士墓は、京都妙心寺塔中の桂春院にある。

五 宝山にみる聖・俗二態の行動傾向

禅者としての印象

ここで、もう一度前に戻り、宝山が教育者として世俗的社会に復帰後、その人からと行動が、第三者に如何に受けとめられているか、を考えてみたい。

宝山の人物像を回想した文章を『伝記』中より拾うと、

「儒仏の教、禅教の道を渾然一身に体现したかの観」（天岫接三）。「元来宝山君は漢学の素養深く仏典に通曉されていた。名利に恬淡で生活は質素」（浜口義兵衛）。「宝山という男は不思議な男だ。長い間欧米諸国に遊んだが一向ハイカラぶった所はない。円覚寺妙心寺辺で随分鍛えた体だが、さりとして一向抹香臭くない」（杉浦広太郎）。「恰も禅宗の古尊宿の如

き風」（遠山禅益）などの表現がある。

これは、禅者（らしい）と印象づけられた記述である。印象とは主観であるから、表現に或る種の誇張があるのは避けられない。しかし主観とはいえ対象のある主観である。還俗して教育者となった宝山が、なお禅者（らしい）と思われる対象であったことは重要である。

事実はすべて彼の生涯の伏せられた部分―禅門の修行時代としての基層体験に、水面下でつながっているが、回想者の知覚の場に入ったのは、あくまでも還俗後の教育者・宝山の世俗的行動傾向である。その世俗行動のなかに禅者（らしい）ものが感得されたということは、耐久学校の教育を理解するうえで重要な意味がある。

更に、この禅者（らしき）の行動を補足するならば、宝山の数多い漢詩作品のなかに、禅的風光を楽しむもの、禅の師友との交わりをうたったものが少くない。

風吹煩惱雲 月照真如鏡

此境絶思慮 無人知究竟

吾独守吾道 敢言與俗乖

夜深天地静 明月照幽懷

夏日訪無閑居士

水走清溪雲繞山 碧層樓在畫函間
訪君恰似逢僧話 贏得浮生半日閑

送鈴木大拙之京都

羨君胸底一塵無 去々来々身世孤
五十三亭秋正好 白雲紅葉入西都

送宗演禪師

恰若盲龜得浮木 音容相接開心目
今朝送別未深悲 所惠說文晨夕誦

などはその一例である。⁽⁴³⁾ また世俗者・居士としての参禅は、還俗後もなお続き、鎌倉円覚寺の後には京都妙心寺の小林虎関に就き、晩年の小倉時代にも、九州に参禅の師を求め、大分市万寿寺足利柴山を推薦されたこともある。こうしたことが一層彼をして、俗人であってなお禅者（らしき）の印象を強く他に与えたのである。

しかし、これを単なる第三者的印象としてのみ解してよいだろうか。改めて宝山の人格のなかに、その主体的・実践的意味を問う必要があると思う。

禅の表層現象と基層体験

前述した居士禅者としての宝山の印象的把握は、日常行動

「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向（松本）

に対する感覚にもとづくものであり、その限りでは表象現象の観察といわざるをえない。感覚されえない基層領域については、殆んど語られるところがないのである。その基層領域における体験の内容については、すでに述べた。結論的には、その基層領域の体験を重視するということである。

宝山において、耐久学舎の教育理念は、世界的視野へ開かれた知的拡大があると同時に、その為には、最も素朴に、あるいは根源的具体的に内へ内へと「身体」に迫まる教育があり、それは宝山の一体どこから生じたものか、その起因を基層領域の体験にみるというのである。

この身体で行ずることが重要だという認識には、勿論、彼が留学時代にふれたプロテスタント教徒からの影響もあったろうし、また居士として参じた臨濟禅での体験にも因るところがあったろうと思う。しかし、ここに最もつながると思われるのは、十一歳から十九歳に至る曹洞禅修行の下積み時代の体験ではなからうか。

たとえ何であれ、人をして強烈な印象のもとに感化させるということとは、人格の基層から滲出してくるものがなくてはならない。幸いにして宝山の場合、この基層体験が、新しく表層で接触し受容されたものと軌を一にしていた。若年時代の禅修行は未成熟の裡に見切りをつけられ、生の形態も聖から俗へ転じたが、身体「行」としての基層体験の軌跡

は、なお身体を基盤として存続し、自主自律の生活つまり臨濟禅へも積極的に近づき、プロテスタント的なものへの共鳴へとなりえたのである。

宝山は「幼いとき禅寺生活をしていたことがあったせいかな……ほんの一滴かと思われる水で手拭をしぼって（身体を）摩擦した」とは、のち妙心寺教学部長となった香村宜圓の言葉⁽⁴⁴⁾であるが、ここには、厳しかった若年時の修行体験が、後年の行動を律していることを物語っている。惜一滴水の修行は、観念的文字ではなく、叢林の日々の生活のなかで、身体に印刻されたものだからである。

前にも引いたように「喫茶喫飯の間に於ても、とらるる所作が益々禅化し、殆んど禅坊主的であるのに感服しました」と、宝山の家庭の一員として三度の食事を共にした遠山禅益が述べているが、遠山もまた妙心寺派の僧籍にあり、宝山の平常底に、基層体験の行が生きていることを見抜いている。

釈宗演は、宝山を評して「氏の主義の基く所は倫理学の精神にもあるだろうが、自分自らは主に仏教の禅に原因するのだ」と言っているとし、それは「大学時代に始めて鎌倉に来り、私の禅関を敲かれたときに始まる」と言っている⁽⁴⁵⁾。しかし、この居士禅の開始以前に、長く不遇な雲水修行時代のあったことが宝山理解に大切である。たとえば、喫茶喫飯時における禅的所作の原型も遡ってこの雲水時代の身体に印刻さ

れたものとみる。後年の居士禅は、この身体的「体験」を上から加圧してエネルギー化し、浮上して思想や文化的色彩をもち、表層に展開させたであろう。宝山自身は意識しないにせよ、ここに曹・臨を超えた一脈のつながりを見ることができ

る。もし宝山の世俗的人格（教育者型人格）の行動に、禅者を思わしめるものを第三者が感得するとすれば、それは彼の内部で、宗教と教育の聖・俗二態の行動様式が、前述したコップ型の人格構造の形式で矛盾なく機能しえていたからである。教育者としての世俗的信念行動の実践において、宝山は自らに潜在顕在した禅的行動の要求をもみだしていたであろう。少くとも耐久校時代の宝山においてはである。

附録資料

耐久学舎における宝山の教育方針の特色を最も簡明に集約した文章が、同氏の伝記中に収録されてある。編者によれば『実業の日本』（年月日不明）紙上に掲載されたものから抜粋され『子已会通信録』に転記されたものと言う。二十条に並記した長文であり、やや期待感の過剰な向きもあるが、その特色を理解するのに最も便利なので、全文を左に示す。

耐久学舎の教育方針

▲如何にして独立自治の精神を養ふか

特色第一、一人の小使を置かず。学生は目下三百人を收容すれども校中一人の小使をも置かず。生徒は貧富の別なく自ら学び自ら労働せざるべからず、校内外の洒掃さいそうの如きは日々生徒中より当番を設け雑巾掛けより草取りに至るまで一切之に当らしめ、不潔なる便所と雖も舎監率先して手を下し決して学生外に委ねず。

特色第二、寄宿生の共同自炊。寄宿生百余名の食事は一名の炊事長（四年生）七名の炊事当番を置き毎日交代にて自炊せしむ。

特色三、生徒監督の規則を設けず、学校は生徒の自主的精神を尊敬し、生徒自らをして己れを監督せしむる方針を取り、区々たる規則を設けて彼等を拘束する事なく、凡て寛大の主義をもつて待遇しつつあり、一二悪生徒の生ぜん事を憂へて、為に多数良能の発達を犠牲に供するは同校の固く取らざるところなり。

特色第四、寄宿舎各室は自治制。寄宿舎二十八室を七部に分ち、部長（五年生）、室長（四年生）を置き舎内の事は一切部長會議、室長會議に依て処理せしめ、舎監は唯寄宿生の相談相手たるに止め強いて干渉せず。されば部員相和して兄弟の如く、或部は共同して新聞雑誌を購読し、或部は茶話会、演説会、討論会を開きて相研磨し、或部は遠足会を催して健脚を誇るなど宛も一大家族の如き觀あり。

「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向（松本）

特色第五、喇叭も鐘も鳴らさず。起居の時刻は大体の標準を示すの外、各自の独立心に訴えて僚友相励まし放逸遊惰に流れざらしむ。故に同校は喇叭も鐘も鳴らざれども早晝夜陰、自然の内に規正を保たる。

特色第六、寄宿舎に門限無し。業余寄宿生の外出することあるも、別に帰舎の門限を定めて拘束する所なし。校門は自由解放なり、それが為に大なる不都合を生じたるを聞かず。

特色第七、欠校届を強ひず。生徒若し事故ありて欠校することあるも、別に欠校届書を差出して其理由を特に陳弁するを要せず、翌日出席の時一言其次第を述べれば可とす。

特色第八、金錢は自由に出納す。但し寄宿生の所持金は舎監之を保管し、零錢の微と雖も事ある毎に支出し、仮令一人にて日に幾回を重ねるも煩を厭はず。故に学生は予め一度に不要の金まで受取り置き無益に費すの弊に陥らず、金錢を適宜に処理するの美風を養ふを得。

特色第九、農業労働を行ふ。学校には附屬農園あり、毎週一回各級生徒をして順次に菜穀を植え、施肥、耕耘、収獲等を実行せしめ、某収穫は寄宿生の食料に購入する。

特色第十、労働会の設置。二年級以上の生徒にして学資に乏しく自己の労働に依り其幾分を得んとする者に基本金五百円の「労働会」を設け、(一)養鶏、(二)文具販売、(三)理髮、(四)写字、(五)使丁、(六)殖林等の各労働に毎日二時間乃至三時間宛従事せしめ其報酬として毎月金壹円五十錢の配当を与ふ。

特色第十一、試験に重きを置かず。校則としては試験を別ちて臨時・学期・学年の三種と規定しあれども、主義としては試験に余り重きを置かず、平素の成績を以て大体の標準とし、教師の参酌に任ず。又其成績を掲示したる事なく、生徒の席次は専ら身長の順に従ふのみ。要は詰込主義、鸚鵡主義の教育に反対し、各自の独立心に訴へて学ばしむるを要す。

▲如何にして實際的知識を養ふか

特色第十二、理化学器械多し。理化学器械は斬新なるものを努めて購入し其費を吝おしまず。其設備の整へること遙に和歌山県諸中学を抜き、且つ東京市内にて最有力なる中学と雖も遠く及ばざるものなり。

特色第十三、インキ、齒磨の類を造る。理化学応用の一端として生徒をしてインキ、齒磨、ペンキ、パテの類を製造せしめ、其品は相当代価を以て生徒又は学校の用に供す。

特色第十四、氣象観測所を設く。物理学の応用を兼ね直接農家に關係のある氣象観測の爲めに、氣象観測所を設置し、生徒中の有志をして毎日時を刻して之に当らしめ、其結果を和歌山観測所並に中央氣象台へ報告す。

特色第十五、社会現象を問題と爲す。修身問題の如きも常に社会眼前の現象を捉ふるを主と爲す。

▲如何にして人格を修練するか

特色第十六、真理の研究、真心しんしんの発揚。日時を期して演説会、討論会、文章朗読会を開き知識を磨き思想を練り、一には公衆

の前において臆面なく自己の意志を告白する勇らしき氣象を訓練す。此外新刊雑誌書籍の共同購入、並びに会報の発行

特色第十七、美情の涵養。平生余暇を以て音楽、絵画を練習せしめ、時々音楽会、絵画陳列会を開き之を奨励す。又特筆すべきは毎月二回の祝賀会なりとす。既往の偉績を追慕敬仰せんが爲、古今東西偉人の生死日及び歴史上重要出来事の発生せし其日を以て記念会を開き、式場に肖像地図又は記念物品を陳列し、之に關する講話をなし精神を崇美ならしむ。

特色第十八、意志及び身体の鍛練。大に戸外運動を奨励し、擊劍、ローンテニス、操舟、ベースボール、遠足、遊泳等盛んなり。殊に学校所在地は四周形勝の地にて、後は緑の山を負ひ、前は漫々たる紀州の海に臨み青松白砂窓下に連なり磯洗ふ波の音、枝に奏づる松風の声手に取るか如く天地開豁風光絶佳……中略……戸外運動に対する天然の特色他に比すべくもあらず、剛健の氣象はかかる方法に依り、かかる形勝の地にて養成せらる。

▲父兄、生徒及び教職員と学校との關係、

特色第十九、父兄と学校との連絡。毎年夏季休暇を利用して舎長舎監共に寄宿生の父兄を訪問し、相互の希望を問答して意志の疎通を図り得る処極めて多し。父兄又時々来校して寄宿舎に起臥し子弟の校内生活を親睹して帰る。

特色第二十、此校の教職員は一風変りたる別世間的一団体なり。舎長以下月給を目的とせず位置の榮辱を念とせず、唯人物

教育を愉快とするの外何等の希望なく、一校を愛する我家の如く生徒を導く我子の如く師弟の情誼到れり尽くせり。是れ当今教育界の最大特色とする。

註

- (1) 駒沢大学仏教学部研究紀要第四十四号。
- (2) 日本宗教学会第四十五回学術大会第六部会『宝山良雄について』、『宗教研究』二七一号。
- (3) 前掲紀要四十四号一—三頁。
- (4) 『裁松宝山良雄先生』一卷、一九三二、瀧浦文弥編集、宝山先生遺著出版会発行。以下「伝記」と略。同書に「さきに公にされた『裁松遺稿』とあるが、これは結局入手することが出来なかった。関係資料としては「同志社文学」、宝山が関係した諸学校校友会誌等に若干の記述あり。本稿は『伝記』に得るところが多い。
- (5) 拙稿「明治初期における仏教受容の一形態」(印度学仏教学研究第三十五号所収、一九八七)。
- (6) 北条については、拙稿「北条時敏における人間と禅」(駒沢大学仏教学部論集第九号、所収)、「北条時敏—その教育者・禅者としての人間像」(『近代日本の思想と仏教』東京書籍一九八二、所収)参考。
- (7) 鈴木馬左也については、拙稿「真清居士・鈴木馬左也の人間と禅」(駒沢大学仏教学部紀要第四十一号所収)。
- (8) 鈴木泰山『可睡齋視点—中陰地方仏教教団史稿』二一二頁。『伝記』三九一頁。
- (9) 禅林寺同教区内の古老、齡延寺(大阪市天王寺区)住職の談による。
- (10) これは宝山をめぐる経済的事情の好転とも考えられる。兄外

「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向(松本)

- (11) 三郎の大学卒業の見通しが近づいたことにも関係がある。『伝記』六三五頁。
- (12) 同 五三一頁。但し『仏教未来記』なるものは確認し得ない。
- (13) 同 三七六頁に洛陽子已会略則あり、明治二十一年子年より二十六年已年に至る洛陽同志社の同級学生の団結を目途したるもの、通信録を刊行する。
- (14) 現在同志社大学図書館にあり、短文ながら若干の惜別の辞が収録されており、当時の宝山の交友関係の密度が知られる。
- (15) 駒沢大仏教学部紀要四十四号、同四十号、比較思想研究第九号参考。
- (16) 『伝記』五三八頁。
- (17) 註6参照。
- (18) 『伝記』五六〇頁。
- (19) 同 五二八頁。
- (20) 同 二五八頁。
- (21) 註5の論文参照。円覚寺について言えば釈宗円のアメリカ帰国後より参禅者が増大した。例えば中島信行夫人、元良勇次郎、夏目漱石、菅虎雄など。詳しくは『円覚寺史』一九六四、春秋社刊参照。
- (22) 『伝記』六三六頁。
- (23) 同前 五八三頁。
- (24) 同前「花園学論」と題するもの、三三九頁以下。
- (25) 同前 三五七頁。
- (26) 同前 三六三頁。
- (27) 同前 六四〇頁、遠山禅益「花園と那者」。
- (28) 同前 六三九頁。
- (29) 同前 四四八頁。
- (30) 同前 六三〇頁。食費節約のため野生の根菜を取って食べ

- たこともある。
- (31) 同前 四二八頁、この例話は宝山が所々にて話したものと見え、複数の人が彼より聞きしことを伝えている。
- (32) confirmationは、元来キリスト教用語であるが、仏教的に言えば得度以降の立身・嗣法・瑞世・建法幢の儀式的手続きは、その当事者に宗教者としての経歴を強化することであり、同時に宗教意識の強化に連動するものと思われるが、宝山はどこまでその形式過程を踏んでいるか不明である。
- (33) 現、耐久高等学校では、職員機関誌「耐久」を刊行して教職員の研究向上に資している、現・耐久中学は校庭に浜口梧陵の立像、真美健の碑、旧建物を保存し、耐久学舎の精神的伝統保存に努めている。昭和六十三年夏、現地調査の折、種々な協力を頂いた。
- (34) 『浜口梧陵伝』全一冊杉村広太郎編、大正九年刊、以下『陵伝』と略す。筆者蔵の同本の扉には、梧陵の男子浜口擔が関東大震災に遭い、安政の大海嘯を想起した一文が自筆されている。
- (35) 『陵伝』一五二頁、ハーンの文中では五兵衛として登場。ハーンの Cleanings in Buddha's Field 1897 所収。
- (36) 『伝記』五六八頁。
- (37) 同前 四〇二頁。
- (38) 昭和六十三年秋の調査、同校の校訓は「強く、正しく、美しく」、宝山は同校第五代校長。同校操会誌『小倉のこしき』二十二号参照。彼は、この中で「Plaine living and high thinking を理想とす」とのべている。なお、小倉西高等学校図書館誌『図書館』六三号（一九八九・二二六）の宝山特輯号に拙稿「宝山良雄先生」あり、
- (39) 『伝記』五五一頁以下。同様内容による耐久学舎の紹介として栗原省「宝山良雄覚書き」（耐久高等学校職員機関誌『耐久』四号所収）がある。一九七八。
- (40) 同前 三六九頁。
- (41) 同前 四四六頁。
- (42) " 五八二頁。
- (43) " 漢詩は五一三頁。
- (44) " 五四四頁。
- (45) 同前 五六〇頁。
- 附記
- (1) 本稿では、宝山の著作（未刊）「マホメット教大意」（明治三十三年稿了）のもつ意義について触れることができなかった。これは彼と比較研究が可能な同じ教育型人格・山本良吉の「回々教大意」（明治二十七年）との関係において大変に興味があるが別稿にゆづりたい。
- (2) 本稿執筆に際して、同志社大学附属図書館、花園高等学校、京都妙心寺塔中桂春院、和歌山県立耐久高等学校、及び同広川町立耐久中学校、福岡県立小倉西高等学校図書館等から資料の貸与・借覧の便宜を与えられたことをお礼申上げる。また一部地区の資料蒐集には江森紘子の協力を得た。
- (3) 本研究は昭和六十二年の駒沢大学特別研究助成費による成果の一部である。